

がん患者の就労継続及び職場復帰に資するナラティブ・データの質的分析

研究分担者 小橋 元 獨協医科大学

< 研究協力者 > 佐藤（佐久間）りか 健康と病いの語りディベックス・ジャパン

研究要旨 「健康と病いの語り」データアーカイブに収録された乳がん、前立腺がん、大腸がんの患者 85 人のインタビューデータを用いて、がん診断後の就労継続、離職の要因を分析した。がん種によって年齢構成や雇用形態、治療内容に違いがあり、それが就労継続の可否に影響を及ぼしていることが分かった。さらに病気や治療による作業能力の低下や職場の環境といった外的条件だけでなく、個々の患者がその仕事にどのような意味を見出しているかということも、重要な要素であることが明らかになった。

A．研究目的

がん患者の就労継続と復職を支援するために、NPO 法人健康と病いの語りディベックス・ジャパン（以下 DIPEX-Japan）が保有する「健康と病いの語り」データアーカイブから、診断時に就労していたがん患者の語りデータを抽出して質的分析を行い、心理・社会的側面からがん診断後の就労継続、離職の要因を明らかにする。

B．研究方法

「健康と病いの語り」データアーカイブとは、ウェブサイト「健康と病いの語りデータベース」のために収集された、多様な疾患や医療体験のインタビューデータ（テキスト）を、研究や教育など非営利目的の二次利用のためにアーカイブ化したものである。

本研究では同アーカイブに収録された「乳がん」「前立腺がん」「大腸がん検診」の語りデータ（計 136 名分）の中から、がんの診断時に就労していた 86 人（男性 45 人 / 女性 41 人）の語りを抽出して、分析対象とした。

データは統計的代表性よりも文脈や特殊性に注目し、事例間の類似性や相違点を明らかにすることを目的とした、maximum variation sampling と呼ばれる標本抽出法に拠って収集されたものであり、個々のインタビューの長さは 1～2 時間である。原則として協力者の自宅で行われ、録音機器での記録に加え、同意が得られた場合は映像も撮影している（7～9 割が撮影に同意）。インタビュー形式は非構造化と半構造化の両方を取り入れ、診断前の様子、治療に関する意思決定、治療の実際、仕事と病気の関わり、家族や周囲の反応などの基本項目について網羅するよう設計されている。

インタビューが行われた時期は、乳がんが 2008 年 1 月～2014 年 3 月、前立腺がんが 2008 年 2 月～2015 年 1 月、大腸がん検診が 2011 年 11 月～2013 年 1 月であった。

録音内容から作成された逐語録は、語り手に送られ、公開を希望しない部分を削除したうえで、データアーカイブに収録されている。それを質的データ解析補助ソフト MAXQDA18 に読み込み、データ横断的に

表 2 診断後の仕事への復帰

	乳 がん (N=39)	前立腺がん (N=33)	大腸がん (N=13)	合 計 (N=85)
元の職場に復帰・就労継続	23 (59%)	22 (67%)	8 (62%)	53 (63%)
復帰後に転職	2	0	2	4 (5%)
復帰後に早期退職	5	4	1	10 (12%)
診断を機に転職	4	0	0	4 (5%)
診断を機に退職	4	6	2**	12 (14%)
診断を機に退職し後に転職	0	1	0	1 (1%)
その他*	1	0	0	1 (1%)

*産休中に発症、そのまま病気休職中 **自営業を廃業

比較分析を行い、就労継続もしくは離職に至った要因を探ることを目的として。がん検診や治療と仕事の関わりについてコーディングを行い、テーマ分析を実施した。

(倫理面への配慮)

分析に用いられたテキストデータは匿名化されており、インタビュー時に本人より、研究・教育を目的とした非営利の二次利用について同意が得られたものである。ウェブサイト上に個人識別につながる顔映像も公開されているが、本研究では映像データは用いない。報告書文中に引用されるインタビューのID番号は、サイト上のIDとは異なるものとして、映像との紐づけをしにくくしている。本研究によりインタビューに不利益や危険が及ぶ可能性は極めて低い。

なお、本研究の実施に当たっては、獨協医科大学生命倫理委員会(大学 29008)およびDIPEX-Japan 倫理委員会(2017-01)の承認を得ている。

C . 研究結果

今回分析対象となった、がんの診断時に

就労していた 85 人の性別、診断時の年齢、診断からの年数、診断時の就労状況、再発・転移の有無、主な治療方法について、疾患別に整理したのが表 1 (次ページ)である。

1) 診断時の就労状況

フルタイム/パートタイム、正規/非正規、被用者/雇用者/個人事業主など多様な就労形態が含まれている。がん種別の特徴としては、乳がんは年齢的に就労している人が多く、女性が多いことから非正規雇用の割合が高かった。それに対し、前立腺がんは罹患年齢が高いため、診断時に就労していても数年以内に年金生活に入った人が多く、定年前の最後の PSA 検診で見つかったという人が複数いた。大腸がんについては、本データではサンプル数が少なく、年齢や就労形態の特性はみられなかった。

2) 診断後の仕事への復帰状況(表 2)

約 2 割は診断を機に退職もしくは転職しており、8 割弱が元の職場に復帰したものの、そのうちの 2 割が元の仕事を続けることが困難で退職あるいは転職していた。つまり離職者の半数以上が診断から治療が始まるまでの間に離職しており、この数字は

表1 分析対象となった診断時に就労していた人々の背景と受けた治療

	乳がん (N=39)	前立腺がん (N=33)	大腸がん (N=13)	合計 (N=85)
性別 女	37	0	3	40
男	2	33	10	45
年齢階層別				
20-39	13	0	1	14
40-49	18	2	2	22
50-59	4	8	5	17
60-65	2	15	4	21
> 65	2	8	1	11
診断後の年数				
5年以下	26	23	8	57
6-10年	6	7	3	16
11年以上	7	3	2	12
就業形態				
自営業	7	8	3	18
フルタイム雇用				
正規雇用	18	21	10	49
非正規雇用	5	1	0	6
パートタイム	9	3	0	12
配偶者あり				
あり	22	31	9	62
なし	17	2	4	23
再発/転移あり				
あり	11	7	2	20
治療の種類				
手術	37	15	9*	62
化学療法	14	2	4	20
放射線療法	23	22	0	45

*内視鏡下ポリペクトミーは除く

2015年の離職タイミング多施設調査(約4割が診断から治療開始前に離職する)¹⁾に比べるとやや高い。

がん種別に見ると、非正規雇用の多い乳がんでは復帰後そのまま就労を継続している人は6割弱と他より低くなっていた。乳がん患者は残り2つのがん種に比べ化学療法を受ける人の割合が高いので、副作用の影響を受けやすいということもある。実際に入院が長引いて職場復帰しても降格されたり、雇止めに遭ったり、なかなか次の派遣先が決まらなかったりしたことが語られていた(表3のA-1、A-2の語りを参照、以下すべて表3の語りを参照のこと)。

一方、前立腺がんの患者は治療後に職場復帰する割合は乳がんより高いものの、定年に近いこともあって、診断と同時に退職したり、いったん職場復帰しても早期退職したりする割合も高かった。2013年に65歳までの継続雇用制度が導入されるまでは、60歳の定年を迎えてからがん罹患して雇用延長が認められず、年金受給年齢に達するまでの間経済的に苦しかったと語る人が複数いた(B-1)。大腸がんでは、年齢的な特性はないが、職域検診で見つかった人に予後が良い傾向があり、ほとんどが職場復帰していた。

3) 就労継続の要因

就労を継続できた理由として、大手企業の社員や公務員は、福利厚生が手厚く(認められている休職期間が長い、傷病手当の金額も違う)、産業医や産業保健師のサポートが得られたことを挙げていた(C-1、C-2、C-3)。また、自営業者や会社経営者は、治療のためのスケジュール調整の自由が利き、職場復帰後の作業量を自己裁量で調節でき

たことを挙げていた(D-1、D-2)。

一方、治療に専念したくても職場のサポートや勤務時間についての裁量権のない労働者は、体力的な負担を覚悟の上で、治療を仕事と並行して受ける選択をすることで、雇用を守ろうとしていた。長期の休みを取れないために、放射線療法と化学療法を同時並行して受けながら職場復帰し、再発時の化学療法では通院するのに仕事を休まなくて済むよう、平日夜間にやっている遠方のクリニックに通っていたと話す人もいた(E-1、E-2)。

また、診断時に就労していた85人のうち、がん検診でがんが見つかった人は23人いたが(うち17人が職域検診)、そのうちの21人が就労を継続していた。検診で早期発見すれば侵襲性の低い治療で済み、職場復帰もしやすい。中には精検受診をためらっていたときにがん経験のある上司に強く勧められて受診した、といった語りもあり(F-1)。職場のがんに対するアウェアネスも、就労継続の重要な要因の一つである。

4) 離職に至る要因

先述したように非正規雇用であることは、離職のリスクに直結している。非正規雇用の人たちは、がんと分かると契約を打ち切られるかもしれない、治療のために就業形態を変えてもらうことが難しい、といった不安を抱えており、そのためしこりに気づいていても受診を先延ばしにした、治療選択においても職場の都合を優先したといった語りが見られた(G-1、G-2)。

正規雇用であっても、中小企業の場合、再発・転移で治療が長引き欠勤が続くと、現場が回らなくなる恐れもあり、パートタイムで働きたいと言っても「辞めていただけた

らありがたい」といわれるなど、雇用サイドの都合で失職につながるケースもある（H-1）。しかし、規模としては小さい企業であっても、経営者自身ががん体験者で、社員ががん検診受診や治療のために休むことに理解があったために、仕事と治療を両立できたと話す人もいた（H-2）。

そもそも長時間労働の職場では、術後や抗がん剤治療、放射線治療中に復帰するのは困難である。非常にストレスの多い環境では、上司から「戦力にならない」といわれたり、セクハラに近いことを言われたりするケースがあり、そこから鬱になってしまう人もいる（I-1）。しかも、忙しいがゆえに治療を先送りしたことががんの進行に影響したのではないかと、という疑念を抱いている人もおり（G-3）、そうした職場に対する負の感情が離職に至る要因となっていることが考えられる。

なお、診断を機に離職した人の割合は全体の2割程度だが、その中でも多かったのは定年間際もしくは雇用延長中の前立腺がんの人、もしくはパートタイム主婦として働いていた乳がん女性である。その雇用による収入が生活に欠かせないものではない場合、治療に専念することを選ぶのであろう。また、実際のステージに関わりなく、「がん＝死」というイメージが先行してしまい、告知を受けて恐怖で仕事を手がなくなった、という人もいた（J-1、J-2）が、そうした「びっくり離職」は多くはない。

術後の後遺症でそれまでできていたことができなくなった、リンパ浮腫のリスクを考えて手を使う仕事は辞めた、などがんの治療が直接的な原因となって離職につながったケースもあったが、むしろがん告知を

機に「自分が本当にやりたいこと」が何かを考え、それを実現するために仕事を辞める、という前向きな離職について語った人も複数いた（K-1、K-2）。

5) 患者にとっての「仕事」の意味

がん患者の就労継続や離職について考えるとき、病気や治療による作業能力の低下や職場の環境といった外的な要因だけでなく、患者自身が自分にとっての「仕事」をどのようにとらえているか、ということも重要な要素である。がん患者の語りにおける「仕事」の意味を分析したところ、大きく3つのベクトルが抽出された。「収入を得る手段として仕事」「生き甲斐やアイデンティティとしての仕事」「ストレスの源としての仕事」である（図1）。最初の2つは人々を「仕事」に向かわせるインセンティブとなるが、3つ目は逆に「仕事」から離れる方向に向かわせる。

非正規雇用の労働者や個人事業主は、実際にこなした仕事の量が「収入」に直結する。従って、他に経済的に頼る先のない人は治療費を賄うために働き続けなくてはならない（L-1、L-2）。

一方、大企業に勤める人や公務員は「収入」の面は保証されていることもあって、それよりも「生き甲斐・アイデンティティ」という面での仕事についての語りが目に付く。がんの診断を受けて休職している間に、会社の中での「自分の立ち位置」が失われるような気がするという女性の語りがその例である（M-1）。また、仕事の「生き甲斐」としての側面に着目すると、がん体験は必ずしも悪いものではなく、職種（医療関係者や教育者など）によっては、職業上の経験値にプラスされる場合もある（M-2、M-3、M-4）。

しかし、大企業であれ、零細企業であれ、職場や仕事が「ストレス」になっているケースは少なくない。実際、「がんになったのは仕事のストレスのせいだろう」と思っている人も複数いた（N-1、N-2）。「ストレス」の様々な要素の中でも、労働時間の長さ、仕事量の多さが職場復帰のハードルを高くし、仕事の質（クレーム対応など）や職場の人間関係などが職場復帰へのモチベーションを下げている。

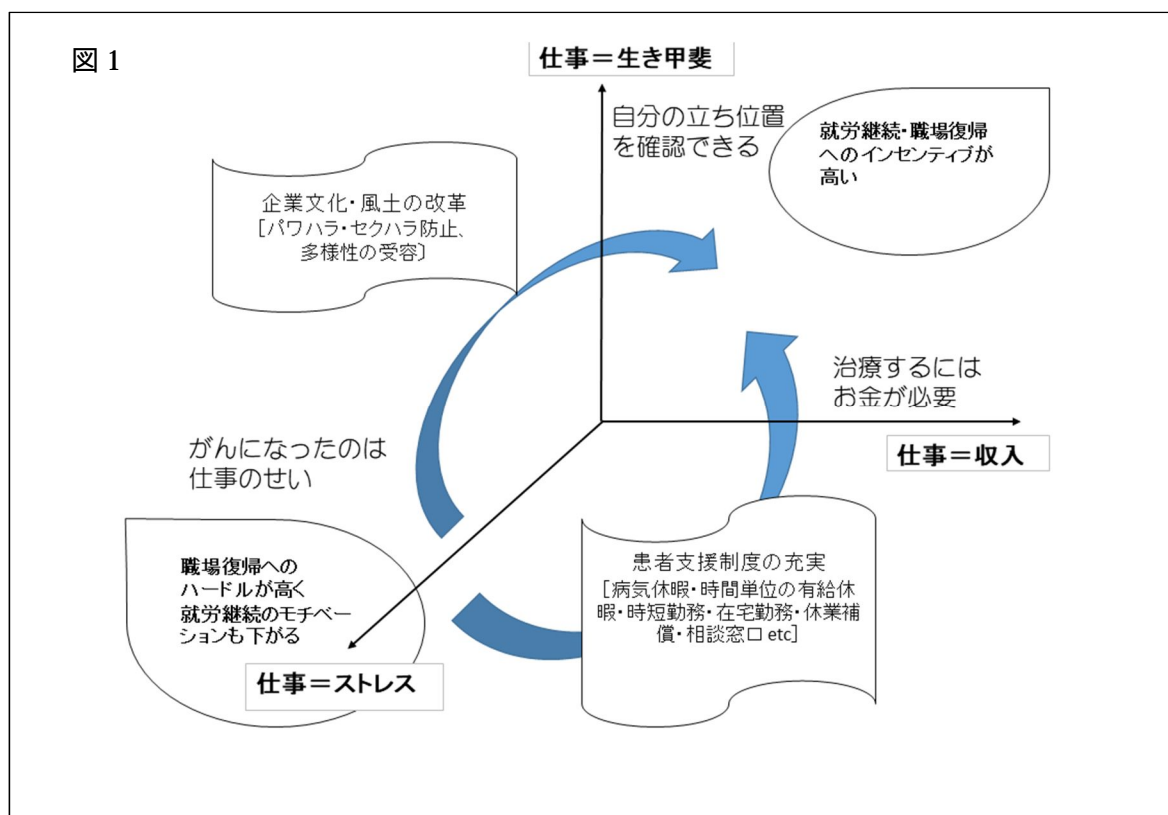
D . 考察

がん患者の就労継続や職場復帰には、性別や年齢、病期に加え、会社規模、雇用形態、治療の副作用や後遺症の有無など多様な要因が関係している。本研究では、主に乳がんと前立腺がんという、年齢性別構成が大きく異なるがん種の患者の就労状況を検討したが、その中で特に際立っていたのは、非正

規雇用で 30-40 代の独身女性たちが置かれている厳しい状況である。年金受給までにはまだ相当の年数があり、治療費を稼ぐためには働き続けなければならないが、治療の副作用や後遺症、再手術や合併症などで働けない状況が続けば仕事を失いかねない。

同様のことは中小企業に勤める働き盛りの前立腺がんの男性にも（もちろん乳がんの女性にも）言えるが、規模の小さい職場は経営者の考え次第でがん患者に対してサポート的な環境にもなりえる。それに対し、短期の雇用で採用されている派遣社員は正社員が受けられるようなサポートが受けられないことが多い。

平成 30 年労働力調査（年次）²では非正規雇用の割合は 37.8%に達しており、その 68.4%が女性である。非正規雇用の女性を年齢階級別にみると 45～54 歳が 365 万人と最も多く、次いで 35～44 歳が 307 万人



と、乳がんや婦人科がんの罹患率が高くなる年齢層に多い。

そうした不安定な立場に置かれた非正規雇用の人たちが、がんの疑いを抱いた時に仕事を失うことを恐れて受診をためらったり、治療を先送りしたり、意に反して退職させられたりしないで済むように、非正規労働者が産業医や社労士によるサポートが受けられるような公的な相談窓口の整備拡充が求められる。

一方、正規雇用で働いている人たちも、制度的には非正規労働者より守られているかもしれないが、がんを罹患したことで「戦力外」「はた迷惑」といった働く人間としての価値を全否定されるような経験をする人は少なくない。もちろんこれはがんという疾患のみにとどまらず、慢性疾患や障害を持ちながら働くことを希望する多くの人に共通する問題であり、それらを職場におけるハラスメントとして認識する必要がある。従来のペースで働けなくなったことでいたたまれずに自主退職に追い込まれる、といったことが起こらないように、パワハラ防止研修などを通じた職場の意識改革も必要だろう。少子高齢化が進む労働市場において、がん罹患経験を単なるマイナスととらえるのではなく、生産性以外の新たな価値基準で評価して生かしていくことが喫緊の課題である。

本研究の限界として、もともとがん体験全般について聞いたインタビューであって、就労に特化したものではないこと、がん種が限られていること、2015年以前に採取されたデータであるため、第2期がん対策基本計画に盛り込まれたがん患者の就労支援政策の影響が反映されていないことなどが

挙げられる。

一方、ここで用いたデータは、原則的に映像・音声・テキストの3つの形式でアーカイブ化されており、映像・音声の一部はNPO法人ディペックス・ジャパンが運営するウェブサイト「健康と病いの語りデータベース」で公開されている。そのうち「乳がんの語り」の「病気と仕事のかかわり」というトピックページには、15個の映像クリップと4個の音声クリップが、「前立腺がんの語り」の同トピックページには13個の映像クリップが公開されている。

<https://www.dipex-j.org/breast-cancer/topic/life/shigoto>

<https://www.dipex-j.org/prostate-cancer/topic/life/shigoto>

現在、がん患者の就労継続を支援するために、患者向けパンフレット、医療者用ガイドブックや企業向けマニュアルなど、様々なツールが作成されているが、映像・音声による体験者の語りには強いインパクトと説得力があるため、今後はこれらの映像・音声の活用により、より効果的な支援ツールの開発が可能になるかどうかを検討していきたい。

E . 結論

診断時に就労していた乳がん、前立腺がん、大腸がんの患者85人のインタビューデータを分析した結果、全体の6割が就労を継続していたが、離職者のうちの半数以上が診断されてから治療を始める前に離職していた。治療と仕事の両立を可能にする要因として、企業側の支援制度の充実があるのは当然のことだが、実際には患者個人の努力(負担)によるところも大きいことが明らかになった。ただ、離職がすべて症状や副

作用や就労環境の不備に原因するものではなく、その仕事に生きがいを見いだせているかどうか、仕事がストレッサーになっていないかといった心理・社会的な要素も関与していることが示唆された。

F . 健康危険情報

特になし

G . 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H . 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3.その他

<引用文献>

- 1 . 高橋都, 働くがん患者の職場復帰支援に関する研究～病院における離職予防プログラム開発評価と企業文化づくりの両面から . 平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金総合研究報告書 .
- 2 . 総務省統計局, 労働力調査 (詳細集計) 平成 30 年 (2018 年) 平均 (速報) .

表3 がん患者の語り

1. 診断後の仕事への復帰状況	
A 乳がんの特徴的な非正規雇用の方の語り	
A-1 53歳(51歳)・ 女性 乳がん・ 派遣社員	何でしょうね。がんになったことがショックというよりも、仕事どうしようとか、管理職なので、すぐには休めないとかね。で、母子家庭なので、どうしてもこう、何ですかね。...どうしようみたいな感じがあったので、...仕事場の人たちがちょうど辞めたときだったので、新しい人を育ててからじゃないと私は休めないという状態だったので、もうそっちを先に優先して、手術は1カ月半ぐらい延ばしたんですね。で、すぐ取れますよみたいな感じで、まあ1カ月半ぐらい延ばしたからといって、リスクはそんなに変わりはないということだったので。(中略)上司の部長の方が「戻ってきてくれ」と、「いつまでも待っている」って言うてくださって、それはすごいわれしかったですね。うれしかったですけれど、まあ結局は退院して戻ってという話をしたときに、降格させられて、それで結局仕事は、私は辞めたんですけど。
A-2 42歳(42歳)・ 女性 乳がん・派遣 社員	病名が分かった時は、一応、派遣先にも 仕事が営業というものだったので、お客さまを担当で持っているような仕事でしたので、そちらで迷惑がまず掛かっちゃいけないということで 派遣先と派遣元とを全部、もうすべてオープンにしました。(中略)その後は、実際にその病名を派遣先にこう伝えて、仕事の、相談というか、仕事を「それでも働きたいです」という意向を ちゃんと示しても、なかなか難しいところはやっぱりありまして。で、実際にその...派遣で、がんになるというのはこういうことなんだったという(笑)のをちょっと思い知ったといえますか。仕事については...、本来であれば公表しない方が良かったのかなというのがちょっとあります。(中略)通院をしているとどうしても、何らかの形で影響が出ないとは限らないので、その分も分かってもらいたいというところで、派遣会社に話をしたんですが、そうすると、もう、えー、仕事としては受けられない、という反応があるところの方が多かったです。
B 前立腺がんの特徴的な定年延長期間中の人の語り	
B-1 61歳(60歳)・ 男性 前立腺がん・ 団体職員	60歳で定年ということで、(中略)、ひと時代前だったら、そのまんま年金生活入れたんですけどもね。60ですぐ移行して。今、なかなかそういうわけにもいきませんで、64から年金生活という形になりましたので、まあ、とりあえず4年間は再雇用ということで、同じ職場。まあ、場所が、関東のほうに変わったんですけども、(中略)結果が出るのと転勤辞令とが大体だぶったような時期なんですけども、いわゆるPSA、まあ、血液検査で、まあ、毎年1回受けておったんですが、どういうわけか、この4~5年はちょっと失念しておりまして、あれは、あのー、オプションでせないかんということなんで、まあ、たまたま忘れておったんですけども、今年で60で最後だということ、オプションで、向こうの看護婦さんのほうから話がありましたんで、「ああ、そろそろ頼んませ」ということで、えー、したんですが。(中略)64まで勝手に年金延ばして、その間(かん)にペアとして、えー、再雇用ということ。そこでちゃん切るんじゃないよという制度がありながら、こういうふうな、わしも好きでがんになったんじゃないんやけども、「あ、もう健康じゃなければ再雇用しませんよ」という。組織としてはそうかもしれませんが、もう冷... ...。まあ、一言でいえば冷たいもんやなど。
2. 就労継続の要因	
C 大手企業社員や公務員の語り	
C-1 45歳(42歳)・ 女性 乳がん・社員	当初はね、私もすぐに復帰できるもんだと思ってたので、もう会社側のほうも、人を代わりに補充するっていうことは、全くなかったんですね。私もそのつもりだったので、とにかく7月に入院して9月に復帰するっていう自分の意気込みもあったんですけど、やはり、手術して入院して、抗がん剤が始まって、放射線治療。全部で、実質的に10カ月、会社はお休みしたんですね。会社側も、まさかそんなに長引くとは思ってなかったってことで、「まだ復帰しないの?」っていう連絡はいただいていたんですけど、だんだんとやっぱり会社のほうも、「これはちょっとただごとじゃないぞ」と思ったらしく、私も今までやってた仕事も、すごいストレスの多い部署だったんで、多分復帰したとしても、同じ部署では働けないだろうっていうことで、当時の上司に相談をして。そしたらもう、本当に恵まれてる会社でよかったなと思ったんですけど、外してくださったんですよ。代わりにもうほかの人を雇っていただいて。もう私は、とにかく、「取りあえず復帰して、考えようか」というような感じでやっていただいたんで、とっっても気が楽でしたね。
C-2 51歳(47歳)・ 女性 乳がん・銀行 員	主に医務室の保健婦さんが間に入って、保健婦さんの上司となる人事部の関係の人が、あの、そういう専門の人がいるんですね。その人と保健婦さんとで間に入っていただいて、私の職場の配属されてるところの上司というんな話とか連絡とか付けていただいて。で、今回(再発後)お休みに入るに当たって、いわゆる本部詰めて言って、「どこにも所属してないよ」という状態にしてくれたんですね。どっかに配属されてると、そこは私が行ってない間、一人減で仕事しなくちゃいけないよって言うので、でも、本部詰めにすれば、一人それを補充する人があ

	てがられるんですね。人事のほうからね。今までは、そういうふうには本部詰めっていう形に なかったの、「早く復帰しなきゃ。早く復帰しなきゃ。みんなに迷惑かけちゃう。早く復帰しな きゃ」っていう焦りもあったけど、今回は、そういう本部詰めにしていただいたことによって、私の 代わりの人が補充されるよっていうことで、ある意味、(治療に)専念できるっていう部分があっ て。そういうのは全部、その人事と、その保健婦さんとでやってもらいました。
C-3 53歳(49歳)・ 男性 前立腺がん・ 公務員	(通院で受けた)IMRT放射線は、1日で一気に当てられないけれど、毎日しなきゃならな かったんだ。土日休んで、多分そうだった。(中略)入院してもいいんですけども、治療する以 外のときは、ただ、何もしないでいなきゃならないんですよ。これもつらいじゃないですか、だっ て。うん。だから、それよりも、やっぱり、生活のリズム、少し、治療しなければならな いっていうのもあるんですけども。だからその分、その点、あの、職場の皆さんには、多分迷惑かけた と思います。皆さん理解していただきましたけど。ある意味これは、地方公務員だからできた ようなものであって、普通の民間の人だったら、ひょっとしたらクビになったかもしれないし。厳 しいところで、そんなに簡単には、やっぱり、思い切って入院でもしてもらったほうがよかったか もしれないですけど。まあ、わたしのある意味、わがままで。
D 自営業者・個人事業主の語り	
D-1 59歳(56歳)・ 男性 前立腺がん・ 設計事務所 経営	実際の治療のほうは、まあ順調に運びましたから、その中身、治療の中身は、まああんまり細 かくお話ししても、まああんまり意味がないかと思うんですけども、まあ、あの、手術受けら れた方にはちょっと気の毒なほど楽しせていただいたものですね。えー、まあ、こんな楽な 治療でいいのかなというのが、まあ、放射線治療の、まあ特徴と言えば特徴ですよ。当時 は、まあ、私、たまたま仕事のちょっと忙しい時期とかち合っていましたんですけどもね。え ー、仕事の、事務所が大阪だったんですけども、どうしても打ち合わせに出なければ いけないときいうのも何度かあったわけなんです。それ全部病院抜けてですね、仕事もやっ てましたし。最後締め切りの間際というようなときには、ざっと病室で机のような形を全部こさ えて、まあ、パソコンもちろん置いてましたし、仕事の図面の束置いてずっとそこでチェックやら 仕事やとかですね、皆ずっと病室でしながら。えー、結構、うーん、まあ、相部屋だったん ですけども、みんなそういうことやってましたですね。
D-2 71歳(64歳)・ 男性 前立腺がん・ 窯業経営	(自営業の)マイナスの面はね、何人かのお客さんから一度に仕事がかたまったときに大変な んですよ。だから、そういうときは、もう、極力、自分のできる量だけ、うん、は、受けますけど、 あとは、少し遅れますよと、遅くなりましてもいいですかということで了解いただいて、受けるも のは受けますけど、そうじゃない急ぎのものは、まあ他の業者さんでお願いしてさういって、 お断りすることもありますねえ。やはり、自分を、時間的に窮屈に縛ってしまいますと、その責 任感のほう为重荷になりますんで、もう、これから、その企業として、利益がそんなに上げられ る業種じゃないんで、まあ、そこそこ生活できればいいかなっていうぐらいの考えで、今は仕事 に従事していますんで。まあ、とにかく疲れない程度のお仕事、うん、お引き受けしながらです から、お客さんも正直言うと、ちょっと頼りない面があるかもわかりませんね、はい、そういう点 では、マイペースと言うのかな、はい、自分の生活を、まあ、この基準で守りたいと思う、その 範囲内で仕事も進めながらやっています、はい。
E 仕事と治療の両立に関する語り	
E-1 47歳(42歳)・ 女性 乳がん・会社 員	(初発の時は)今の会社で、正社員でした。でも、働いてまだ1年ちょっとぐらいでした。(中略) あまり長く休めないの、普通は、抗がん剤と放射線治療っていうのは重ねないらしいんです けど、私はもうそんな休んでられないし、放射線、毎日って聞いているから、「もうやっちゃって ください」っていうことで、一気に全部やってもらったので。放射線のほうはちょうど休職の最後 で終わってましたし、点滴は、あと1回残す感じになってました。最後の最後がもう...重ねれ ば重ねるだけ副作用って重複されてくるので、しんどくなってくるんですよ。で、かなりきつ かったですけど、最後は点滴受けてから仕事に行くみたいな形だったので、もうOL復活してま したし。
E-2 同上	(再発時の化学療法では)私、休むともう有休ないし、クビになっちゃうから、「そこは何とか ならないでしょうか?」ということで、夜に行く方法とかないかと。「サテライト的に、もう診断が ついている患者に抗がん剤だけ夜間にやっているとこがあります」っていうふうな、その先生が、 「僕が担当しています」とおっしゃってくださったので、「そこに、仕事終わってから行きます」 って、仕事休まなくてもいいように、まず段取りをつけていただいて。(中略)で、夜、職場から、 隣の県というか、他府県越えをしないといけないので、定時に退社して1時間半ぐらいかけて その病院行って、点滴を受けて帰ると。8時までには滑りこめば何とかできるので、8時までにと にかく病院に行き着いて、点滴をして、9時ぐらいに帰っていきっていう生活でした。

F 職場におけるがんの Awareness に関する語り	
F-1 51歳(49歳)・ 男性 大腸がん・会 社員(中小企 業)	はい、えーと、一番最初、えーと、見つかったのは、えー、会社の定期的な健康診断で。で、そのときに、検便を、えーと、2日分採るといふことで、えー、採って検査のほうへ出したんですけども、その、えーと、どっちかのほうに、えー、血が混ざっていたといふことで、連絡が入りまして。で、一、再検査...の通知をいただきました。で、一、本来であれば、実際問題、1回ですんで、はっきり言えば行ってね、うん、あの、よく周りから聞けば、痔だったり、ええ、ポリープ程度だったといふのは、よく聞きましたので。うーん、自分としては、それほど重要視していなかったんですけども。で、一、まあ、会社の社長のほうからは、もう再三、再検査...行けといふことを言われましたんで。(中略)社長の...要するに.....言葉といふか、命令といふか(笑)、とにかく行けといふ...ねえ。
3. 離職に至る要因	
G 非正規雇用の人の語り	
G-1 42歳(42歳)・ 女性 乳がん・派遣 社員 (A-2に同じ)	最初に自分で気が付いたのが11月で、年が明けて健康診断に行ったのは8月なので、10カ月近くは何もしていない状態でした。(中略)まず、踏ん切りが付かなかったといふのもありますし、あと、経済的なことを考えると、ちょっとその時の状況で、もし、その進んだがんだった場合に、家族がその病氣療養をしてみましたので、...かなりちょっと経済的な負担が大きくなるだろうといふのと、少しそこまで自分のことに使うまでの余力をちょっと付けるために、仕事を優先しようと思っていました。(中略)最悪の、そのがんだといふことになると、かなりやっぱりもう手術するんであっても、入院したりとか、その後の医療費のこととかを考えると、その時にその経済状態で、といふのはちょっと考えにくかったですね(笑)、はい。
G-2 42歳(38歳)・ 女性 乳がん・派遣 社員	実は2月から、あの、派遣でも仕事のほう決めてたんですね。で、今もし病院に行って最悪がんだと言われたときに治療をまずしないといけない。そしたらせつかく決めたお仕事がまずもうできなくなってしまう。で、派遣という形で働くのは、実はそのときが初めてでして、ちょっとやっぱり正社員と全然雇用形態が違いますので、やはり、ちょっと保障という点で、もう何もなような状態になるんじゃないかといふことで、やはりすごく不安を感じまして、とりあえずちょっと今回はしこりはあるけれども、もしかして良性かもしれないし、放っておいてしまおうといふことで、実はもう放っておいたんですね。
G-3 53歳(51歳)・ 女性 乳がん (A-1に同じ)	待ってくださるといふことだったので、「復帰をするために抗がん剤とかを使うと、いろんな副作用とかが出て、仕事に行けない可能性もあるから、なるべくそういうのは避けて」、みたいな形で、「放射線も毎日5日間を5週間連続行かなければいけないので、ちょっと無理なのか」とか、あるいは会社の近くの病院だったので「休憩時間をそこに使わせてもらおうか」みたいな話をしていた。そこまで考えていたんだけど、企業側は何も考えてくれなくて、結局、私を要らないような形で、復帰をするときに言われたりとかしたので。だったら初めから、辞めさせてくれていれば、もっとちゃんと治療はできたのかなとか思ったりもしますね。仕事があるので、手術も1カ月半延ばしたといふのが、それが原因かどうかは分からないんですけど、リンパまで転移していたので。うーん、何か馬鹿だったかな...とか思いますね。
H 中小企業の社員の語り	
H-1 60歳(57歳)・ 男性 前立腺がん・ 社員(中小企 業)	ちょうど休職期間終わる頃はですね、元気になってきましたね。そこで、休職切れるタイミングをこう見計らいながら(笑)、正直なところ、もう一回働くといふことを選択肢の中に入れたわけですね。もうフルじゃなくても、私の場合は、例えばカウンセリングとか、キャリアサポートの仕事もありましたので、そういったことをやるかっていふこと。あるいは、社内で、社内のそれは、1回、会社には相談しました。現場に戻りたいといふ、復職したい。でも、やっぱり中小企業、厳しくて、拒否されましたね、実質的に。「辞めていただけたらありがたい」ってはっきり言われました。フルタイムじゃなくてもいい。私、自分自身の体のこともあるから、いきなりフルタイムの自信はなかったんで、時間を短くして、曜日を、あるいは少なくするとかっていふ相談に乗ってほしいといふことは、会社に打診しましたが、断られましたね。
H-2 51歳(49歳)・ 男性 大腸がん・会 社員(中小企 業) (F-1に同じ)	前は、何か、その検査入院と手術で、まあ、ほとんど1カ月ぐらい入るのが、検査入院が駄目だったといふことで、要するに、1週間に1回ぐらいのペースで、要するに、いろんな検査に毎回行って、ええ、だから、その都度、やはり、...変な意味で大変でしたね、それは。昔は、何かその、検査入院で1週間やら10日入れたのが、今はそういうのは、入院のあれには入れないみたいな話をされて、ええ。でも、それ、1週間に1回、病院で検査受けるって、とても大変だと思んですけど、そういうときって、会社はどういったお休みになるんですか、もう有給全部使っちゃうんですか、いや、...ま、うちの会社的には、結局、社長が、経験者ですんで、それは、何もなし。要するに、例えば、何時から検査だといふれば、そこで、うん、その時間帯は抜けて、ええ。もう検査戻ってきたら、また普通に働いていってといふことで、お休みの扱いじゃな

	いっていう。じゃないです。うちの社会的には、やっぱり、社長が経験者ですんで、その辺は、...ええ、逆に...ちゃんと行ったってだけで、そういう休みにはしないですね、ええ。
I パワハラ・セクハラ	
I-1 51歳(48歳)・ 女性 乳がん・会社員	あの、嫌だったのは、職場の上司に、えー、ま、告知を受けたあとの、説明して、そのほう、報告というか、せ、あの、「こういう病気になってしまいました。手術をしなくちゃならないので、そのあと治療があるので、お休みをしなくちゃならないです」って言ったときに、「戦力にならないな」っていうふうな、何か吐き捨てるように言われたのがすごく残っていて。そのあと、がらっと雰囲気変わって、「いいよ、いいよ、もう仕事なくて」って言われたんですけど。ただ、その、「戦力にならないな」って吐き捨てるように言われたのがすごく嫌だったのと、それから、職場異動させられて、異動した先で、あの、ちょっと人間関係が駄目になって、で、通えなくなって、あの、休んじったんですけど。そこで、その上司が入れ替わって、替わった、新しく替わった上司の人に、面談したことがあったんですけどね。その人に、ま、病気のことを説明したら、言われたことが「乳房(ちぶさ)切り取っちゃったんですか」って言われて、それで、もう、ショックで。結局、それで、私、1カ月ぐらい眠れなくなっちゃったんですけど。で、あの、精神科に通うようになっちゃったんですけど。そんな言葉を、あれは、一番ショックでしたね。
J 「がん=死」の恐怖	
J-1 61歳(60歳)・ 男性 前立腺がん・ 団体職員 (B-1に同じ)	「ああ、がんか。がんならイコール死ぬことや」って。「ああ、死にたくないや。なら...死ぬまでに何か片付けとかないかん。身辺整理、あれせにゃいかん、これせにゃいかん」。そっちのほうばかりですね。要するにパニックですね。朝、宿舎から出ていく前に顔洗って、歯磨いてやると、すぐ近くに電車が、通勤電車が通るとるんですけども、あそこは丘陵地帯なんで、トンネル多いんですね。で、トンネルに、電車が行き交うのにゴーってな音があつて。もうその音聞いただけで、こちでいう、おぞけづいて。「もう、もう、もう駄目や」と。もう、もう地獄のほうに引きずり込まれるんじゃないかなろうかちゅう、そんな感じで。
J-2 63歳(62歳)・ 男性 大腸がん・喫茶店経営(診断を機に廃業)	自分で検査して、郵送して。ほんなら、2週間ぐらいかかったのかな、郵送で返ってきたら、あれ、2日間やるんですよ、検査をね。そうすると、2日とも、陽性のほうで、再検査すぐにしなさいという書いてあったんで、ほれで、その日もお店をしていたんですけども、お客さんの前で手が震えてくるような感じで。でも、その次の日には、もう近所のお医者さんへ、その用紙を持って行って。(中略)で、すぐに、もう、次の週の頭には、総合病院へ紹介状書いてもらって行って。すぐに、そこで一番早く検査できるのはいつだって。で、もう、12月にはお店休んでいましたからね。もう、全部、そちに.....検査のほうに、...検査がない日でも、もう仕事している気がなくて、うん。
K 本当にやりたいことを探す	
K-1 50歳(43歳)・ 女性 乳がん・グラフィックデザイナー	今までデザイナーでずっとお仕事をしてきてまして、残業どころか、まあ24時間ずっと仕事みたいな感じだったんですけども、すべて見るものが勉強になったり、次の仕事の分の参考になったりって感じだったんですけども。まあ病気になって、同じことを続けなければいけないってというか、続けるのかな、と思ったときに、もう素直にもうそれは嫌だと思ったんですね。確かに自分が好きでこのデザインの仕事をやって、いろいろな企業さんの広告とかデザインとか、本当にそれは好きでやってるんですけども、同じことは嫌だ、とにかく同じことは嫌だと思って。そのときじゃあ自分が、本当の自分は何をしたいんだろうかって思って、自分を見つめ直した1年ぐらいが一番精神的にしんどかったんですけども。(中略)そこでようやく見つけ出したのが、ほんとに自分はものを作るのが好きだということで、それは変わらない。だけど、今までの仕事とはまあ違うような、違うことをやりたい。(中略)自分が本当にやりたいことを見つけるまでに1年ぐらいかかりました。やりたいことっていうのはイコール自分の一番避けたい部分でもあったんで、乳がんの活動っていうのに辿り着くまで、やっぱ1年ぐらいかかりました。
K-2 41歳(37歳)・ 女性 乳がん・看護師→マッサージサロン経営	放射線治療は、えー、退院してから1カ月間通ってたんですけど、毎日。まあ、通って、まあ、治療自体はそんなに苦痛ではなかったんですけど、やっぱ精神的にちょっとね、まあ、落ち込むこともあったんですけど。でも...、あの一、何か毎日がやっぱ楽しくて、何か充実してるなって感じはありましたけど、どこか、心のどこかで何か...、何だろう。何か物足りなさっていうんですか。何かそういったのがちょっとありました。で、それは何だろうって全然分からなかったんですね。(中略)で、あるときに、ある人の話で、えっと、私のこの満たされていない部分っていうのが何だったのかっていうのが分かったんですね。で、それは、あの一、今まで私はやりたいこと...、夢があったんですけど、その夢を諦めていたんですね、ずーっと。で、その夢を諦めてた自分に気が付いたんですよ。気が付いて、まあ、あの一、病気になったことでいろいろ生き方ですとか、自分はね、あの一、どうしてこの病気になったのかとか、どういう生き方をしていきたいのか、本当にこう後悔しない人生を歩んでいるのかというふうなずうっと考えて

	<p>ました。そのときに、やっぱりこう、諦めてた夢を、それを思い出したんですね。それで、まあ、一度しかない人生なので、ちょっとチャレンジしてみようかなっていうふうに思い立ったのが、まあ、えーと、手術してから1年後に、えっと、看護師を辞めて、その一、前から夢であった、その一、マッサージのサロンを、オープンさせたんですね。</p>
<p>4. がん患者にとっての仕事の意味</p>	
<p>L 仕事 = 収入</p>	
<p>L-1 47歳(42歳)・女性 乳がん・会社員 (E-1に同じ)</p>	<p>そして、最初の、初発の治療は、切って、その後、術後の抗がん剤と放射線を行って、その間、3ヶ月間の、仕事の休職をしました。私は一人で暮らしていましたし、病気になったことで、病気になったから家に戻る、親のところに戻るということは考えていなかったで、「とにかく私には優先順位があります」と。 「治療は大事です。命は大事です。でも、それをするにはお金が要ります。だから、働きます。働いて治療します。さあ、どういう治療が考えられますか？一緒に考えてください」というふうにドクターにお願いしました。</p>
<p>L-2 42歳(38歳)・女性 乳がん・派遣社員 (G-2に同じ)</p>	<p>特に私のような派遣とか、ちょっと不安定な位置付けで働いてる人っていうのは、やっぱり会社に知られるとあの、契約できないんじゃないとか、そういうすごく不安もありますし、やっぱり、あの、治療を実際にするとすると、すごく経済的にも負担がかかるんですね。で、安定した収入があっても月々のその治療にお金がかかるとなると経済的にも精神的にも負担がかかるのに、そんな中であの、安定した収入がないってなると、それ以上の負担ってすごいんですね。で、もう、体以上に経済的に家計もひっ迫してくると、実際治療したいのにできない人も出てくると思うんですね。</p>
<p>M 仕事 = 生き甲斐・アイデンティティ</p>	
<p>M-1 50歳(48歳)・女性 乳がん・会社員(大企業)</p>	<p>その、休んでる間というのは8ヶ月間だったんですけども、何かすごくやっぱり不安だったんですね。ずっと仕事してきて、勤めてきて、いわゆる自分の立ち位置の一つがなくなってる、ぐらついてる、そういう感じがすごくあって。でも、やっぱり、抗がん剤のせいで、あの一、いろんなとこしびれたりだとか、気力が続かないとか、いろいろありますから、やっぱり無理もできない。いろいろあって。(中略)で、復職して1ヶ月ぐらいやったり、なんかこう、前の調子には戻れなかったんですが、で、前の仕事に戻るのは無理というのはみんなが判断、周りもみんな判断していて、ですから、24時間呼び出されるような仕事はまず無理だと思いますので、実際に夜中でもお客さまに駆けつけるというのはしょっちゅうありましたので、ま、そういう仕事からは外してもらって、以前からやりたいと言ってたところの仕事に移していただいて、そういう意味ではすごく、その、恵まれてたと思います。(中略)しかも、8ヶ月間ずっとお給料出てましたし、それで前半のその年の休んだときも含めて評価が下がったわけではないので、普通の評価でいられたので、すごく周りに恵まれたというふうに思ってます。</p>
<p>M-2 34歳(32歳)・女性 乳がん・看護師</p>	<p>誰かに必要とされているということが、何か心の健康のためにはすごく大事なんですよ。何か、家にその病欠中で休んでいるときも、家に1人でいると心の中がこう澱んでしまうという。自分だけの考えだけで、誰にもしゃべれず、こう何かしゃべっていても、何ていうか。誰か聞いてくれる人がいないとやっぱり張り合いがないし。ご飯を食べるのも1人だと寂しいし、やっぱり、人は1人では生きていけないんだっていうのをすごくこう病気をして痛感したので、誰かのお役に自分が立てるんだったら、自分の生きているうちは、元気なうちは、そういうお役に立てるように半日でも何でも、行って話を聞くだけでもいいから、自分の健康のためでもあり、その患者さんたちのそのためでもあるっていうところで、すごく仕事は大切ですね。</p>
<p>M-3 41歳(37歳)・女性 乳がん・看護師→マッサージサロン経営 (K-2に同じ)</p>	<p>当時、私は看護師をやってたので、えーと、そうですね。まあ、あー、2週間で復帰をして、で、仕事に戻ったときは、あの一、何かすごく新鮮でしたね。うん。何だろう、あの一、今まで特別変わりはないんですけど、すごく、患者さんとのこの接し方が、こう、自分では、何て言うんですかね。柔らかくなったなっていうような、こう思ったりですとか、ちょっとしたことで嬉しいとか、こう、きれいだなとかって、普段、何気なく見過ごしてたことが、あの一、すごく輝いて見えたりとかっていうふうな感じはすごくありましたね。</p>
<p>M-4 46歳(35歳)・女性 乳がん・教員</p>	<p>中学校の教員をしています。えー、ちょうど中学校2年生ぐらいの、(中略)自分のしんどさで、自分が今、本当にどんだけこういろいろ恵まれていたり、ある面はしんどいけど、ある面はいい思いをしている、幸せな思いをしているっていうようなことが受け入れられない、そういう年ごろの子たちに、健康で、元気で、何でもできるとき、自分がしたいことをしようと思えば何でもできるときにあるっていうことを、何かうまい方法で伝えていければいいかな。私自身を振り返っても、中学校のころ、高校のころ、自分のしんどさばかりで周りに八つ当たりもしてたし、そういう思いもあるし、自分が病気になるまで、自分が本当に恵まれているとか、自分がこう...、何でもや</p>

	<p>るうと思えばできるっていうことがありがたいなっていうことをこう感じるということがなかったの で、それが自分が病気になって、自分の 10 年後の命はとかいうことに向き合ったときに、あ あ、でも、仕事もできる。あのー、子育てもできている。こんな私でも、誰かの役に立っている って感じられたときに、すごく幸せだったんです。だから、そういう思いをなかなか、中学生ぐら いって、言うたら言うだけ反発するんだけど、何かいい方法で伝えていけることができないかな。 で、それをすることが、私のこの職業に就いた意味でもあるかな。こんなこと言ったらすごくこ うね、恥ずかしいんですけど、そんなこと思ったりもしています。</p>
N 仕事 = ストレス	
<p>N-1 60 歳 (57 歳) ・ 男性 前立腺がん・ 社員 (H-1 に同じ)</p>	<p>お客さま相談室みたいなもの、まあもっと平たく言うとクレーム対応をする部署ということで、そ の仕事をしておりました。まあそれは、実はその発病にかかわりがきつとあるというふうに思う んですけども、精神的なストレスというのは、かなりやはり強い。まあ特に私の場合は現場でこ じれたクレームの話を全部もう一度今度こう解きほぐして、お客さまのところにまずおわびに行 って、お客さまの気持ちを全部受け止めて、そして、もう一度お客さまに会社としてどういうこ として差し上げたらいいかというお話を、ゼロからもう一度するような形になりますので、まあ あの、本社に上がってくるというのは、やはり現場の対応が悪くて上がってくることになりま すので、まあ非常にこじれた件が実際には多かったです。</p>
<p>N-2 79 歳 (56 歳) ・ 男性 乳がん・会社 員</p>	<p>まず、がんになるような仕事をしておりました。小さい会社が急激に膨張しましたんで、ばか でちよんでも偉くなれたわけです。管理職になるわけです。ほんなら、やっぱり、能力のない人 間が、小さい器が大きな器に変わった場合、どうしていいかわからなかったわけです。数字と の追っかけっこですから。ですから、5時会社終わりますと、それから自分の部下を 20 何人ぐ らいおりますが、飲みに行ったり、ま、入れも変わりもマージャンをやって、それから、飲み に行って、それから、するもんですから、それがコミュニケーションと考えていました。で、家へ帰 るのが、大方 3時ごろで、ご飯食べる日だけお母さんに、「本日はご飯を食べます」言うて(笑) 連絡します。そやから、朝 9時に、あの、会社始まりますが、朝礼がありますんで、それも、何 かしゃべらないかんから、牛乳 1本飲んでそのまま走っていきました。不規則。それから、どう ですか。全ての面において、病気になって当たり前のような生活やとったような気がします。 まず、職業はそういうことで、営業管理職をやっておりましたんで、今考えてみると、当然がん になって然るべきような生活状態であったと思います。</p>